

鈴木翔氏（東京大学大学院教育学研究科在学）講演

～教室での序列が子どもたちの心に及ぼす影響とは～

毎年、2月に群馬県高等学校教職員組合が主催して開かれる「教育のつどい」は教職員が中心になってさまざまな角度から教育を考える研究集会です。今年は全体会での講演を『教室内（スクール）カースト』（光文社新書）の著者である鈴木翔さんにお願ひしました。

スクールカーストとは

カーストとはインドの伝統的な身分制度のこと。それが中高の学級内にも存在することを意味するスクールカーストという言葉が2006年にネット上に登場しました。同学年の子どもたちが、お互いをランク付けして1軍・2軍・3軍、イケメン・フツメン・キモメンなどと呼ぶ。ステイタス（地位）の決定要因としては、人気やモテ度、足が速いなどの運動神経。1軍は「遠足のバスは最後列」「学級委員や生徒会はやらない」「制服をいじる」。3軍は「グループ分けで余る」「休み時間寝たふりしている」「異性とコミュニケーションとれない」。「スクールカーストがいじめの温床になっている」「自尊心を傷つける可能性がある」との指摘もあります。

サブグループに所属すること

ヤンキー、清楚派、地味などグループに分かれること自体は問題ではありません。問題はそこに上や下が生まれることです。上のグループの半数以上が学校生活に満足していますが下のグループは20パーセント程度にとどまっています。下位グループに所属していても「仲のいい子と休み時間を過ごせて楽しい」と受け止めることも多い。しかしクラス全体で合唱コンクールの練習や文化祭の準備など、一つのことに取り組むときには「被害を受ける」と感じています。意見が言えないから。

教師の捉え方

日本の先生は学力の高い生徒が好きで、成績のいい子をひいきする文化があると言われていいます。しかしそれよりもスクールカーストの地位が高い方がいいと思われていることがわかっ

てきました。下位の子に対しては「自己主張ができない生徒」という見方をしています。「ぼそぼそとしゃべるからやりづらい」と。逆に「目立つ子」は「コミュニケーション能力が高く、生きる力を備えている」と。学校は社会の縮図だから、弱肉強食の社会に出るための練習を学校でするとよいと考えている教師がいます。授業でも、上位の子に「振る」と盛り上がる、と言います。

対処法・生徒編

上位も下位も面倒くさいと思っているカーストだけれどぶっ壊せない。困っている子には学校の人間関係が期限付きだということを忘れてほしい。学校がすべてだと思つて逃げられないで自殺とかに行つてしまいがちです。学校

以外の居場所を見つけることもよいと思います。ダンススクールや進学塾などで自分の目標最優先の生活をするのもよい。学校が死ぬほど辛ければ選択肢が見つかるまで学校に行かないのも一つです。小中高と学校に行かなくても高卒認定試験を受けて大学に進学することもできます。



対処法・教師保護者編

教師の方に！「覇気」とか言わないでください。「ああいう子はいずれダメになる」など、予知能力を発揮しないでほしい。決めつけられると生徒も辛い。保護者の方には「この子も辛いのだろうな」と想像してほしい。家が居場所でなくなると最悪の事態になってしまいます。

《以上、主催者発行の高教月報 968号から抜粋しました。 文責・イラスト：倉林 順一》